

受付番号

留学・研究計画書

氏名 細川 晋太郎	留学機関名 釜山大学校
留学先国名 大韓民国	留学期間 西暦 2009年4月～2010年3月
研究テーマ <p style="text-align: center;">三国・古墳時代における韓日交渉の考古学的研究 — 倭系遺物からみた韓半島・日本列島の相互作用 —</p>	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>本研究の掲げる三国・古墳時代は、韓半島、日本列島とも大王・王をはじめとする権力者のために、高塚墳墓の造営と器物の副葬を主とした造墓活動が行われた時代として重要な位置を占めます。また、韓半島の諸国および倭王権の発展に伴い、相互の交流もこれまでにないほど活発に行われつつある時代でもありました。</p> <p>近年、韓国東南部地域（伽耶地域）における古墳の発掘調査に伴い、日本列島との交流を示す器物である、いわゆる「倭系遺物」が多く出土しています。中でも、日本列島における古墳時代前期後半を中心に出土する資料が確認され、4世紀代における韓日交渉を研究する上で有効な資料が提示されつつあります。考古資料から当該時期における韓半島と日本列島の交流の諸相が徐々に明らかになり、今後も韓日出土の倭系遺物相互の比較研究は欠かすことができません。</p> <p>申請者はこのような状況のもと、『古文化談叢』第51集において「前期古墳副葬紡錘車形石製品の性格」と題する論文を発表し、日本を主体として韓国東南部地域においても確認されている紡錘車形石製品に着眼し、新たな観察視点から過去の研究を再吟味し、古墳時代社会においては被葬者の立場や職掌を表す器物であった可能性が高いことを明らかにしました。しかし、韓国出土資料を実見していないために日本列島内での事例検討に終始した点、他の倭系遺物との比較検討を尽くせていない点で課題を残しました。また、倭系遺物の中でも筒形銅器や巴形銅器をはじめとする青銅製品の研究は一定の成果が収められ、それらをもとに政治動向を探る研究も展開されています。一方、石製品や鉄製品の比較研究は必ずしも十分に尽くされていない現状にあり、日本列島における位置づけも明確ではありません。そのような現状にあって、両地域における遺物の消長年代の検証を尽くさずに展開される交渉論と、そこから導き出される多様な解釈について、その曖昧性を再検討する必要があると考えます。</p> <p>今後は個別的な検証作業を経て、倭系遺物の生産と流通について総合的に把握する視点が必要不可欠です。そのため、倭系遺物の製作技術や材質に着眼した精緻な観察、図化作業から得た成果をもとに、韓日出土資料を個別的に吟味・検討する必要があります。そして倭系遺物が確認されている韓日相互の古墳群および各古墳の諸要素を比較検討することで共通点と差異を明らかにし、韓半島と日本列島の古墳文化の特質を比較することを通して、三国・古墳時代社会の構造的特質の一端を解明できるものと考えます。4世紀代における韓半島と日本列島の交流・相互作用の実態を考古学的に研究することによって得られる成果は文献史学による成果とも密接な連関性を有するため、これまで史料を中心に構築されてきた歴史認識にもアプローチする契機となり得ることから、東アジア史的観点からも大きな学術的意義があります。また、その成果は新たな歴史像の構築に寄与するという大きな社会的意義があると考えます。</p>	

成果報告書

記入日 2011年 4月 11日

氏名	細川 晋太郎	留学先国名	大韓民国	所属機関	釜山大学校博物館
研究テーマ: 三国・古墳時代における韓日交渉の考古学的研究 — 倭系遺物からみた韓半島・日本列島の相互作用 —					
留学期間 : 2009年 3月 ~ 2011年 2月 (奨学金受給期間は2009年2月から1年間であるが、その後は私費で1年間期間を延長した。本報告は私費留学期間を含めた2011年2月までの成果である。)					
1. 活動報告					
<p>倭系遺物に関する研究は、日韓での比較検討が可能という点から、これまでも多くの研究者により検討されてきている。しかし、韓半島出土資料自体の観察等を踏まえた検討は少なく、実態としては不明瞭な点があった。したがって、今必要とされているのは遺物個々の資料化という極めて基礎的で、なおかつ欠かすことのできない作業を通じた、資料自体に基づく検討なのである。</p> <p>私が検討対象とした資料は、韓半島南東部において集中的に確認されており、所属機関が釜山にあることから調査にあたってはとても動きやすかった。可能な限り観察・実測調査を実施し、それに伴い検討対象資料が確認された遺跡から出土した資料もあわせて調査を行なった。また、古墳群から出土した遺物や遺構などを調べ、古墳群の性格を把握することに努めた。</p> <p>なお、報告書が刊行されていないために資料を使うことができないなど制約が伴い、当初計画していたとおりにいかないことも多かった。しかしそうしたなか、倭系遺物が多く確認された金海市大成洞古墳群の調査主体機関であり、資料調査で大変お世話になっていた慶星大学校博物館の金幸佑先生から報告書作製への参加の話をいただいた。金海市に所在する大成洞古墳群から出土した遺物のうち重要性の高い遺構の遺物は、国家帰属扱いになっており、大半が国立金海博物館に所蔵されている。それゆえ、報告書刊行前の調査はできない状態であった。金先生は私の研究状況を理解してくださっていたので、「必ずしも自身の研究に沿うものばかりではないかもしれないが、やってもらえれば報告書も刊行できる。もしよければ。」との言葉をいただいた。自身の研究に関わる資料およびその他の資料の整理作業も、研究対象遺跡の実態を把握するまたとない機会であり、これを引き受けた。</p> <p>そして、資料調査以外で挙げなければならないのは研究者との対話であろう。倭系遺物に対してどういった認識を持っているのか、研究者や調査機関の担当者により、製作地や性格、時期的な問題などについて、必ずしも韓国国内で共通しているわけではないということを知った。それは日本の研究に対しての考えとも密接に関係し、特に古墳の年代観などは日本の研究者との隔たりもある。研究会や酒の席では、先生方から日本のほぼ共通した見解を痛烈に批判されることもしばしばあったが、私は相手がどのように考えそうした違いが生じているのかを理解することに努めた。双方の考え方(捉え方)は現時点では埋まらない。しかし今後も、各研究者が資料に根ざした研究を積み重ねていくことによって必ず糸口が見出せるものと考え、私自身もその一翼を担えるよう努力していく所存である。</p>					

2. 成果発表状況

韓国国内において、以下の発表・論文投稿等を行った。

- (1) 口頭発表: 2010年12月18日に行なわれた『第94回 釜山考古学研究会』において、発表する機会をいただいた。内容は、各所蔵機関において調査した韓半島出土の筒形銅器の製作技術に関するものであり、私にとって初めての韓国語による発表となった。当日は多くの方々から質問や指摘をいただき、自身の視点や考え方を確認する大変有意義な場となった。／「韓半島出土 筒形銅器の製作技術復元」『第94回釜山考古学研究会資料集』 pp.52～73
- (2) 論文・研究ノート・発掘調査報告書: 上記の発表内容およびその他に倭系遺物に関わる論文・研究ノート等を発表した。発表内容はすべて韓国語、掲載誌等は以下のとおりである。
 - ・「韓半島出土 筒形銅器と柄の接続方法」(論文)『考古廣場』第6号 釜山考古学研究会 pp.55～74 2010年6月刊行／ 柄が良好に残る筒形銅器を対象とし、その接続方法を検討した。その結果、様々な形態がある一方、柄の接続方法や下端の位置などにおける強い共通性があることを確認し、筒形銅器に付与された性格などに関する情報が形態差を越えて共有されていた可能性を指摘した。
 - ・「韓半島出土 筒形銅器の製作技術復元」(論文)『科技考古研究』第16号 亜州大学校博物館 pp.43～69 2010年12月刊行／ 資料の観察を通して製作技術を復元した。その結果、韓半島の筒形銅器の製作には、2つの製作技術が採用されていた可能性が高いことを明らかにした。
 - ・「大成洞古墳群出土 倭系石製品について」(研究ノート)『考古廣場』第7号 釜山考古学研究会 pp.27～36 2010年12月刊行／ 大成洞古墳群から出土した倭系石製品をもとに、同種類の石製品を副葬する日本の古墳との比較を通して、年代的問題について言及した。
 - ・『金海大成洞古墳群Ⅳ』慶星大学校博物館(発掘調査報告書) 2011年3月刊行／ 大成洞古墳群の首長墓と考えられる1～3号墳を中心とする発掘調査報告書である。国立金海博物館に収蔵されている鉄製品・金銅製品等の図化作業を行い、合わせて報告文を分担執筆した。

3. 成果と今後の課題

資料の観察と図化作業に基づいて、これまで不明瞭であった倭系遺物自体の様相を少なからず明らかにできた点は、今後の日韓資料の比較研究にも寄与するものと考えられる。また、多くの倭系遺物が出土し、長らく正式報告書が待たれていた金海市大成洞古墳群(1～3号墳)の報告書作製に関わることができたのは思いがけないことであり、この上ない経験となった。

倭系遺物のなかでも最も多く確認されている筒形銅器は、韓国においては1980・90年代における主要古墳群の発掘によって出土して以降確認されていなかった。そうしたなか、金海市にある良洞里古墳群の発掘調査において筒形銅器が出土した。さらに、金海市望德里遺跡においても筒形銅器や倭系石製品が出土し、これまで確認されていた遺跡以外でもその存在が明らかとなった。発掘調査担当者のかたから、いち早く連絡をいただき調査することができた。助成期間の終盤ではあったが、実際に出土した遺構とともに見ることができたことは大変貴重な経験となった。しかし、助成期間中に自身が作製に加わった発掘調査報告書の内容および新出資料の成果を反映させ、課題に掲げたことまでできなかった点は反省せねばならない。総括的な検討に関しては現在準備中であり、これまでに発表した成果を踏まえて、今後公表していく予定である。

4. 留学全般に関する感想

私が受け入れ先として選んだ釜山大学校博物館では、申敬澈先生をはじめとする多くの方々にたいへんお世話になった。また、資料調査においては、関係機関の方々にたいへん親切に対応していただいた。右も左もわからないまま韓国に渡り、なんとかやってこられたのは、周りで支えてくださった人々のおかげである。この場を借りて、深く感謝申し上げたい。

留学を開始してからは、言語・習慣等、生活に馴染むので精一杯であった。約半年ほど寄宿舎に住みながら大学付属の語学学校に通い、まずは生活言語の習得に努めた。しかし、それを経たからといって会話が十分にできるわけではなく、もどかしい日々が続いた。それでも、所属先の人々・学生たちとの会話や資料調査などを通して、少しずつ上達していったと思う。拙い話し方ながらも初めて自分で連絡をとり、日程を相談し資料調査を実施できたときは、ほっとしたというか、なんともいえない気持ちになったのを覚えている。

釜山大学校の考古学科は、先生をはじめとして頻繁に酒を酌み交わしながら親交を深める伝統？があり、それも釜山に打ち解けていくよい場となった。酒がそれほど得意ではなかった私は、このままやっていけるのかと不安に思うこともあったが、なんとか付き合うことができているのを見ると、少しは体が慣れたのだと思う。また、先生方や学生さんたちには、発掘調査現場を見学に行くときやどこかで研究会があるとき、休日に遺跡や博物館を見に行くときなど、ことあるごとに誘っていただいた。来たばかりで何も知ることができないなかで、常に気にかけて声をかけてくださり、視野を広くする機会を与えてくれたことがたいへん嬉しかった。

日常においては、私が住んでいた釜山は港町であることから、休みの日はぶらっと海を見に行くことが多かった。海沿いにある観光地としても有名なナンポドン(南浦洞)は獲れたばかりの海産物がならぶ大きな市場、そして若者向けの町が混在し、いつ行ってもにぎやかで、週末ともなると多くの人でごったがえしていた。韓国の元気を感じられる場所のひとつだろう。少し高台に上ると海と町が見渡せ、山の斜面に密集して建つ色とりどりの住宅も相まってきれいな景色が広がる。港町ならではの風景に、心癒されたものである。また、景色といえば釜山大学校の裏にある金井山を外すことはできない。金井山は峰に沿って朝鮮時代の山城が築かれており、遺跡および登山の名所として知られる。山頂からは釜山の町と海が見え、よく晴れた日には対馬島も眺めることができる。こうした地理的環境のなかで日本との交流があったのかと体感できる場所でもある。なお、山頂付近には「金泉岩」と呼ばれる場所があり、釜山大学校の正門から3時間半ほどで到着する。昔そこに金の泉が湧いたという伝説があるのだが、実際には水は湧いておらず、雨水が溜まっているだけである。しかし、山の名前の由来ともなった場所だけあって、そこからの景色は格別であった。

数年前に、お世話になっている方々に同行し初めて韓国に来た。本では知っていたが、実際の資料や遺跡を見ることで日本との関係性を痛烈に印象付けられ、留学したいという気持ちが強くなった。そのときに釜山大学校を訪れた際、申敬澈先生が留学することを勧めてくださった。実に様々な出会いのなかで、自分は生かされているのだと感じる。

そしてなにより、あのとき思い描いた場所で活動できたのは、松下国際財団の皆様ならびに審査員の先生方の後押しあつてのことである。最後に、心より感謝申し上げたい。ありがとうございました。



資料調査の状況。
慶星大学校において



釜山大学校の正門から約3時間半。
金井山(山城)の山頂付近、金泉から
対馬島を望む。
日本が見える。



金海博物館での整理を終え、考古学仲間と合流し食事に行く。テーブルに並ぶのは名物の豚足。
国立金海博物館の近くにて。